

「生きる力を支える豊かな心を育むための指導の工夫」－命の大切さを学ぶ体験活動を通して－

I 研究の内容 文部科学省指定「児童生徒の輝く心育成事業 ～ふれあい応援プロジェクト～」

1 活動の概要

(1) 活動の計画(5学年)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
勤労生産	自然の秘密をさぐる(ジャガイモ栽培) 総合的な学習の時間(6単位時間)		自然の秘密をさぐる(稲作体験) 総合的な学習の時間(12単位時間)										
自然	魚や人の誕生・生き物の飼育		理科(4単位時間)		自然教室 特別活動(2日間)		鳥の巣箱かけ 総合的な学習の時間(4単位時間)						
ボランティア	お年寄りとの交流		特別活動(2単位時間)		お年寄りとの交流		特別活動(2単位時間)		クリーンキャンペーン 特別活動(通年合計 3単位時間)				
複合									命の学習		総合的な学習の時間(6単位時間)		

(2) 活動の内容

① ボランティアなど社会奉仕に関わる体験活動

- ・ 地域のお年寄りと交流を深めたり、地域のごみ拾いや自然環境を守る活動に参加したりすることを通して、命の尊さや自然や環境の大切さについて理解を深める。

② 自然に関わる体験活動

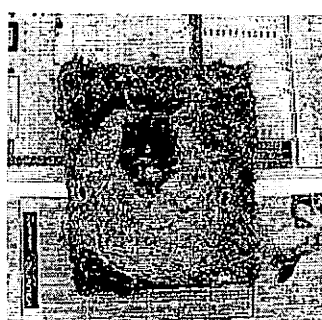
- ・ 生き物を育て成長の様子を観察する活動を通して、命の大切さについて理解を深めるとともに、身近な自然や環境問題に関心をもつ。
- ・ 自然教室を通して、野外観察や昆虫の生態観察をおこない、自然環境や生き物について理解を深める。
- ・ 鳥の巣箱かけや巣箱調査を通して、地域の生き物に興味や関心を持ち、自分から関わっていかうとする態度を養う。



巣箱の取り付け



11月の巣箱(児童宅)



左の巣箱の中の様子



その他の巣箱の状況



③ 勤労生産に関わる体験活動

- ・ 農園や水田で作物(野菜・稲)を育てる体験活動を通して、作物を大きく育てるには様々な手間や努力が必要なることを知るとともに、作物にも命がありそれらを食べることで私たちが生かされていることを学ぶ

④ その他これらが複合した体験活動

- ・ 保健指導と関連させながら、母親の胎内で育つ赤ちゃんや出産について学ぶ活動をおこない、自分が誕生した時の様子と重ね合わせて、命を大切にしたい気持ちを養う。

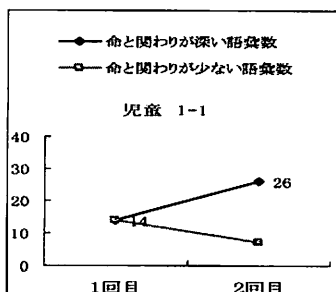
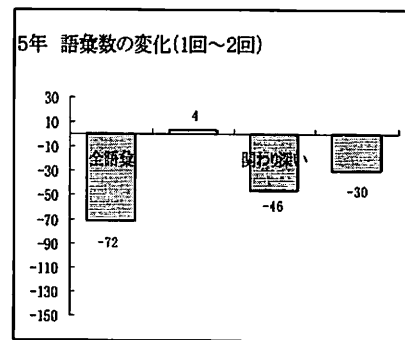
「命の学習」(5学年)

過程	時間	学習活動	・支援 *評価 ※教科との関連
課題把握	1 本時	1 赤ちゃんウサギを観察したり、触れたりして感想を発表し合う。 2 ウサギのぬいぐるみにも触れてみて比べてみる。 3 「命とは何か」を課題として把握する。  ウサギの赤ちゃんに触れ、感想を発表し合う	・実物のウサギとぬいぐるみの違いに気づかせる。 * 意欲的に観察し、記録しようとしているか。(ア) * 課題把握ができたか。(ア)  子ウサギのぬいぐるみに触れ、比較する
追究する	1	(人間の命について考える) 4 人間の赤ちゃんについてどう思っているか話し合う。 5 友だちの赤ちゃんの時の写真を見て、感想を書く。 6 赤ちゃんの周りの人(家族や近所の人)はどんな気持ちでその赤ちゃんを見ていたか想像してみる。 7 5と6について発表する。 8 赤ちゃんは何のために生まれてきたのか考えてみる。	・1/2 成人式の取り組みやお父さんお母さんの気持ちを考えてみるよう働きかける。 * 意欲的に考えたり、発表したり、友だちの考えを聞くことができたか。(ア・ウ) ※理科「人のたんじょう」
深める	1	「いのちの学習プログラム」(助産師会) (体験から命を感じ、命を知る) 9 ドプラー(超音波)で代表の児童の心臓の音を聞く ・感想を発表し合う。 10 おなかの中の赤ちゃんの心臓の音を聞いたり、おなかに触れたりする。・妊婦さん登場 ・感想を書く ・感想を発表し合う。	・主体的に活動できるよう、必要に応じて個人への助言を行う。 * 主体的に活動しているか。(ア・イ・ウ) ※理科「人のたんじょう」
広げる	3	(深められた思いの確認と友との交流) 11 単元の最後の学習として自分の思いを作文にし、発表しあうことにより心の交流を図る。	・事前に作文を書くことを連絡しておき、意識付けを図る。 * 自分の思いを表現したり、友だちの思いを理解したりしているか。(ウ・エ) ※国語科「伝え合って考えよう」 ※道徳科「母とながめた一番星」 ※道徳科「手のひらのかざり」 ※保健体育科「心の健康」

II 活動の評価・成果と課題

ウェビングによる検証より

ウェビングにより、体験活動を通して子どもたちの「命」に対する考え方や心の変容をとらえる。変容のとらえ方として、「語彙量の変化」による変容の把握、「語彙の質」による変容の把握の両面からとらえている。その際、出現した語彙を「命から直接発想した語彙」(価値のある語彙群)、「命と関わりの深い語彙」(価値のある語彙群)、「命と関わりの少ない語彙」(価値の低い語彙群)に分類し、体験活動の前後での変化の様子に焦点を当てておこなった。その結果、他の語彙が減少しているのに対して、価値のある語彙群(命から直接発想した語彙)が増加していることから、命に対する考えが深まり、命の大切さを学ばせる体験活動の有効性がみられる結果となっている。



となっている。

体験活動を実施するには、教師の体験の視野を広げることも必要である。また、子どもに体験させるためには、準備や人材の確保が不可欠であり、そのための十分な時間も必要となる。そして、体験をするだけにとどまらず、体験活動を通して何を学ばせるかということが重要になる。私たちは2年間の研究で、体験を通して「命」について学ばせることの大切さや難しさを実感してきた。質の高い体験活動を実施し、ねらいに迫れるようにしていきたい。

(研究主任 武井 茂)